

# 第1回 ステークホルダー ダイアログを開催

## 「環境・社会報告書2009」を読んで

社会から信頼される企業グループであり続けるため、新日鉄は健全な事業活動とともに、環境問題への対応や社会への貢献についても従来から積極的な取り組みを行ってきました。また、国内の鉄鋼業では初めて1998年に「環境報告書」の発行を開始し、2005年からは「環境・社会報告書」へと充実させるなど、社会とのコミュニケーションにも前向きな努力を続けてきました。さらに2009年8月25日には、環境と生活・経済と社会の問題を関連づけて活動されている4名の方に東京・千代田区の新日鉄本社にお集まりいただき、第1回のステークホルダーダイアログを開催。最新版となる「環境・社会報告書2009」をもとに、新日鉄の環境・社会の取り組みや報告書自体について語り合っていました。約2時間にわたるダイアログの中から主要な発言部分をご紹介します。

### 出席者

国際海洋研究所 (IOI) 日本支部 事務局長	桂川・相模川流域協議会 代表幹事 環境カウンセラー	東京財団 政策研究部 研究員兼政策プロデューサー	司会 持続可能な発展のための 日本評議会 (JCSD) 事務局長
大塚 万紗子氏	河西 悦子氏	吉原 祥子氏	黒坂 三和子氏
新日本製鐵 参与・環境部長	新日本製鐵 環境部 環境リレーションズグループマネージャー	新日本製鐵 環境部 環境リレーションズグループ	
山田健司	篠上雄彦	根津くみ子	

### 鉄とは鉄鋼業とは。 基礎的なことも伝えてほしい

**大塚** 今回、初めて新日鉄の報告書を読んだのですが、環境への取り組みに長期的展望があり、しかも総合的かつ具体的なことには感心しました。

**吉原** 私はとくに、新日鉄の技術力や生産性の高さを知ったことが印象深く、国や産業を支えている世界的な企業であることを再認識しました。ただ、事前の工場見学などで会社について説明していただいたことが大きく、報告書だけでこれほど理解できたかといえば疑問が残ります。世界の製鉄業の現状や、その中での日本、そして新日鉄の位置づけという“全体論”が冒頭に示されていれば良かったように思いました。前年度版にはエネルギー効率を国際比較した図がありましたが、ああしたものは再掲載しても良いのではないのでしょうか。

**河西** 私は今回、生活者の目線から参加させていた

だきましたが、普段の暮らしの中で鉄鋼業界を意識することはほとんどありません。しかし実は、生活に非常に密着した産業なんですよ。こうして鉄鋼業を再認識したのも工場見学などの体験が大きく、報告書からもっとそれが伝わればと感じました。

**大塚** 考えてみれば、この会議室にあるもので鉄に関係しないものはないぐらいですからね。製品を造る型まで含めて考えれば。

**河西** それに、鉄は私たちの身体の中にも、土壌にも森にも海にも、地球環境の中にもとから存在する物質です。しかも製鉄業には古くからの歴史があり、長い時間の中で細かな問題点も含めほぼ解決されてきた。素材自体が本来的に環境と対立するものではないし、その点は鉄鋼業界の特長なので、こうした報告書などでもっと訴えていくべきではないかと思います。

**黒坂** 大量生産による問題は別にあるにしても、この十年や数十年の間に生まれた多数の化学物質や

素材に比べて、鉄自体の安全性が高いのは確かですから。当事者が積極的にアピールするのは難しいのですが、鉄の価値や、鉄鋼業の存在意義の深さは、この報告書を含めてもっと積極的に発していくべきではないかと私も思います。

**山田** その点は、一般の生活者の方々に製品を直接販売しているわけではない素材産業であることの弱みなのかもしれません。自分たちのことをアピールするのに慣れていないもので。

**黒坂** 「環境・社会報告書」という性格もありますし、最近の社会風潮を思えば防御的な表現にならざるを得ないのは理解できますが。ただ、こうした時だからこそ、鉄は社会の基盤を支えている事実を理解してもらおう好機と前向きに考えて対応する方が創造的であり、発展的ではないでしょうか。



### 人類の基幹産業であることに もっと自信を

**大塚** 環境問題をすべてCO<sub>2</sub>の排出で語ることに疑問もありますが、日本のCO<sub>2</sub>排出量の約14%を鉄鋼業界が占めると聞けば、どうしても注目が集まるし削減努力が求められます。ただ、社会の基盤を支えている産業であることは私たちも知るべきだし、それを知らせる努力が足りない気がしますね。

**吉原** きちんと知れば、鉄鋼業は国の基幹産業だし、歴史的に見れば人類の基幹産業だと理解できるんです。

**黒坂** だからこそ、鉄そのものや鉄鋼業が持つ本質的な意味や意義をもっと伝えるべきだと思うのです。自動車や家電を含め、私たちの身の回りにあるものはほとんど、何らかの形で鉄に依存している！そのことを正しく知ってもらう――。

**吉原** 鉄が自分たちの生活に欠かせないものであると理解すれば、鉄鋼業が排出しているCO<sub>2</sub>は、私たちが排出しているCO<sub>2</sub>でもあると感じられるはずですよ。自分たちをPRすることは苦手かもしれませんが、その事実をもっと広く知らせることも新日鉄の役割ではないでしょうか。

**黒坂** それを納得できる形で伝えるためにも、先ほど吉原さんが指摘した鉄鋼業の全体像、総論が必要なのではないでしょうか。

**河西** あと、これは各論の1つになるのですが、プラスチックのリサイクルに関して、新日鉄が国内における資源再生で大きな役割を果たしていることは新しい発見でした。私たち生活者は、必要だと思っからこそ市町村単位で行われているプラスチックの分別・回収に積極的に協力していますが、それが最終的にどう処理されているのかを知る機会がなかなかないのが現実でした。それが今回の報告書を読んで、新日鉄の製鉄所などで処理されていることがわかり確認ができました。

**大塚** 確かに、その先がよくわからず続けていたリサイクル活動に、あらためてきちんとした意義を見つけた気がしますね。こうして処理され再生されるのだと知れば、回収活動が続けることにより前向きな気持ちになれます。

**河西** ですからプラスチックリサイクルに関しては、もっと広く社会に知っていただくべきだと感じます。

**根津** 私たち自身も生活者であること。報告書を含め会社の活動を広報していく上では、そうした視線が薄れていたかもしれません。

### 今後の社会の「構想力」にも 期待したい

**吉原** 報告書全体のことなのですが、「環境報告」に比べて「社会性報告」の部分が弱いことが気になりました。

**河西** ここで鉄が持っている社会への役割に触れたほうが良いのではないのでしょうか。

**大塚** あと、社会性報告の冒頭に“株主・投資家の皆様とともに”という項目が入っていますが、こうした報告書ではもっと一般の生活者中心に考えても良いのではないのでしょうか。

**黒坂** 株主・投資家向けには、他にも年次報告な

どもあるのですから。思い切って女性や若者や子どもに向けたメッセージから始めても良いかもしれません。これからの社会を支えるのはかれらたちですし、将来、株主・投資家になってくれるかもしれないのですから。

**篠上** なるほど。そういう発想は持てませんでした。私どもの事情を言えば、環境報告書は11年の歴史がある一方、社会性報告はまだ5年が経った程度です。慣れないところもあり、どう充実させるかは今後の課題と考えています。

**吉原** 全体のことでもう1つ気になったのですが、ビジョンというか、新日鉄がこの先の社会をどう考えているのかを示すのは難しいのでしょうか。日本では人口減少が進み、超高齢化社会に突入していく。世界的に見ると環境問題の深刻化や資源の枯渇といった課題がある。今までのように経済成長のために公共インフラをどんどん造るわけにもいかず、社会も鉄鋼業界も方向転換せざるを得ません。そうした中、鉄を通じた今後の社会づくりについて、新日鉄がどうリーダーシップを取っていこうと考えているのかが知りたいと思いました。

**黒坂** 環境負荷をこれだけ低減している、社会面でこんなことをしているという「守り」ではなく、持続可能な未来に向けて、こう貢献できるという「攻め」の部分を知りたいのは確かですね。

**吉原** 世界的なビジネス競争の場で、日本の企業

は「構想力」の弱さで欧米の企業に負けるというのはよく聞く話で、日本の鉄鋼業のトップ企業であるからこそ期待なのですが。



**山田** 企業の一員であると、逆に自分のことが見えなくなる場合があるのかもしれませんが。また、長く続けることで「報告書はこういうもの」と固定観念に縛られていた面もあったようです。今日、皆様とお話しして、白紙に戻って考え直し、新たなコンセプトのもとに「環境・社会報告書」の作成に臨む必要性を痛感しました。

**黒坂** 私たちもこのダイアログを通して、鉄のことを学び直し、総合的に見る意味を再認識する良い機会になりました。新日鉄の活動には、これからも注目していきたいと思います。

**山田** 本日は貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。



国際海洋研究所 (IOI)  
日本支部 事務局長

### 大塚 万紗子氏

聖心女子大卒業後、コロンビア大学修士課程修了(比較教育学)、シンクタンク研究員などを経て、1987年に株式会社インターコムを設立。1999年より国際海洋研究所(IOI)日本支部事務局長。また科学技術・学術審議会の海洋開発分科会臨時委員も務める。



桂川・相模川流域協議会  
代表幹事 環境カウンセラー

### 河西 悦子氏

静岡大学教育学部美術科卒業。富士市立須津中学校教諭、静岡大学教育学部美術科技術助手、都留文科大学非常勤講師などを経て、結婚後は主婦業と市民活動・制作活動に取り組む。桂川・相模川流域協議会代表幹事。また大月森づくり会の代表も務める。



東京財団 政策研究部  
研究員兼政策プロデューサー

### 吉原 祥子氏

東京外国語大学卒業(タイ語専攻)。在学中、タイ国立シーナカリンウィロート大学へ国費留学。米レズリー大学大学院(文化間関係論)、米Institute for International Educationバンコク支部を経て、現職に至る。



持続可能な発展のための  
日本評議会 (JCSD) 事務局長

### 黒坂 三和子氏

1970年代に発電所立地の社会・環境アセスメント業務を経験後、ヨーク大学環境学大学院修士修了、エール大学教授の日本人の自然観調査補助、1989年から世界資源研究所(WRI)日本責任者、1996年からJCSD事務局業務を兼務し京都COP3会議への協力等、持続可能な発展の実現に努める。